

主 な 作 品

*番号は作品リストの番号と一致します。

1 茶湯一会集 1冊 【展示リスト2】

縦26.8cm 横19.2cm

井伊直弼 筆

江戸時代後期

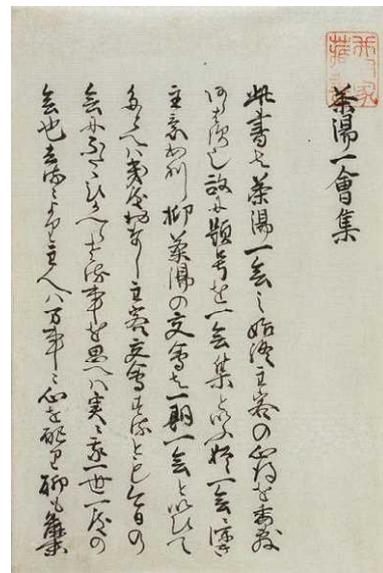
安政4年(1857年)

当館蔵(彦根藩井伊家文書)

重要文化財

井伊直弼が、自身の茶の湯の集大成として執筆した茶書。茶会の進行に添って、主客の所作や会話の内容、心構えを説くもので、推敲を重ね、安政4年(1857)に完成したと考えられています。

直弼は、茶の湯において、主と客の心の交流を最も大切に考えていました。それを一言であらわしたのが、この書の冒頭部分に記された「一期一会」という言葉です。この言葉には、一度の茶会での出会いは一生に一度のものであり、心を尽くして出会いの時を大切にしようという意味が込められています。この言葉は、茶湯一会集によって、広く世に知られることとなりました。



2 竹一重切花生 銘園城寺 1口 【展示リスト10】

高33.4cm 口径10.5cm

伝 千利休 作

桃山時代

東京国立博物館蔵

千利休作として有名な竹の掛け花生。正面にひび割れがあることから、園城寺の割れ鐘にちなんだ銘がつけられています。茶人自作の竹花生は、その茶風を偲ばせる貴重な存在とされてきました。直弼は、利休をはじめとする先人の茶の湯を学ぶ中で、彼らの自作の茶道具についても深い関心を寄せたようで、「閑夜茶話」という書に、その逸話を書き記しています。この花生についても、「宗易作が名物ノ筒園城寺」と記しています。



3 黒楽茶碗 銘此花 1口 【展示リスト68】

高9.1cm 口径11.6cm

楽道入 作

江戸時代前期

出光美術館蔵

全体に黒釉を掛けた、楽焼の茶碗。胴に、黒釉が掛からず白い素地が露出している部分があり、花のように見えることから、「此花」と名付けられました。楽焼は、千利休好みの茶碗を作るために楽長次郎（?～1589）が創始し、楽家の代々が制作に携わったやきもの。道入（1599～1656）は楽家三代で、「楽の名手」と謳われた名工です。直弼の茶会記には、道入の作品が度々登場し、好んで用いていた様子が見えます。



4 月次茶器 中村宗哲作 12口 【展示リスト69】

高5.0～7.5cm 胴径5.5～9.2cm

江戸時代後期

個人蔵

直弼が自ら細かな注文を与えて制作させた十二合揃いの薄茶器。千家十職の一家として知られる塗師、中村家8代宗哲が制作しました。鎌倉時代の歌人藤原定家が十二月の花鳥を詠んだ「詠花鳥和歌」にちなんだ意匠が、丁寧な塗りとは細やかな線で表現されています。和歌にも深い造詣を示した直弼らしい好みの作品です。



5 楽焼蓋置 七種 【展示リスト87】

高2.4～7.2cm 胴径4.4～8.0cm

井伊直弼 作

江戸時代後期

本館蔵（井伊家伝来資料）

直弼自作の楽焼の蓋置。直弼は、青年時代から楽焼を始め、家族や家臣に贈っています。本作は、火舎、五徳、三葉、古印、栄螺、三人形、蟹から成る七種の蓋置。細部まで丁寧に作り込まれた優品です。



くろうるしぬりくりやまおけみずさし
6 黒漆塗栗山桶水指 1口 【展示リスト92】

高27.5cm 口径24.7cm

井伊直弼 作

江戸時代後期

当館蔵（井伊家伝来資料）

直弼が日光名産の曲物の桶まげものを入手し、茶の湯の水を入れておく水指みずさしという器に仕立てた作品。もとは茶道具ではなかったものが、直弼の見立てによって茶道具に作り変えられたのです。産地の栗山くりやまについて詠んだ直弼の和歌「栗山の 苔の下水 こゝにだに 賤かしわしずぎを 汲てこそ しれ」が書きあらわされています。

栗山桶を茶道具に見立てた水指は他に3点確認され、茶の湯の弟子をはじめとする周囲の人々に贈る目的で、複数作られたと考えられます。

